

20104

Predictors of Severe Dissections After Balloon Angioplasty in SFA lesions

<sup>1</sup>倉敷中央病院

島田 健晋<sup>1</sup>、羽原 誠二<sup>1</sup>、田中 裕之<sup>1</sup>、後藤 剛<sup>1</sup>、門田 一繁<sup>1</sup>

目的：浅大腿動脈（SFA）領域に対する末梢血管治療（EVT）において、バルーン拡張のみで終了する際の、解離の形態による開存率の差が言われている。方法：2014年7月から2017年6月において、当院でSFAのdenovo病変に対してEVTを施行した230病変の中で、バルーン拡張後の血管造影が評価できた191病変を検討した。血栓性閉塞は除外した。解離の程度はNHLBI分類に従い、None、AからFに分類した。None、A、Bを非重度の解離とし、CからFを重度の解離とした。結果：191病変のうち、168病変（88.0%）において二方向からの撮影が得られた（biplane）。非重度の解離は96病変（50.3%）、重度の解離は95病変（49.7%）に見られた。多変量解析の結果、重度の解離の予測因子は病変長（オッズ比 1.01；95% CI, 1.004-1.017 p=0.0005）、慢性完全閉塞（オッズ比 5.4；95% CI, 2.15-14.8 p=0.0003）であり、保護因子は病変長より長いバルーンの使用（オッズ比 0.37；95% CI, 0.14-0.95 p=0.04）、より長時間のバルーンニング（オッズ比 0.97；95% CI, 0.96-0.99 p<.0001）であった。結論：重度の解離を避けるためには、病変長より長いバルーンの使用、より長時間のバルーンニングを行う事が重要である可能性がある。